C-2 アラビア語チュニス方言の起動動詞が存在を表す用法について

熊切 拓

cyberbbn@gmail.com

キーワード: アラビア語方言　起動相　アスペクト　モダリティ　談話

要旨

本発表では，アラビア語チュニス方言における存在を表す用法を持つ起動動詞 bda:《～し始める》を取り上げた。この動詞は，起動動詞としては完了形が用いられるのに対して，存在の用法においては未完了形のみが現れる。意味的には，この存在の bda: が，存在というよりも「ある基準となる事態に対して，その事態に先行して生じ，その事態が生じているときにも継続している事態」というアスペクト的な意味を表すと分析した。さらにこうしたアスペクト的な用法が，事態の認識に関わるモダリティ的な用法へと発展し，また談話的事態の関係を表す談話的な用法にも繋がっていることを論じた。そして，存在の bda: の用法には，起動の先行性という点で，起動動詞としての意味が関与しているという考察を述べた。

1. 本発表の概要

アラビア語チュニス方言において，起動動詞が「～がいる，～がある，～である」という存在を表す場合がある。副詞 θamma:《そこ》が述語となった (1a) は，この言語の一般的な存在文であるが，(1b) のように動詞 bda:《～し始める》の未完了形に置き換えることもできる

(1) a. **θamma**: rˤaːʒil jiʒriː wraː-jaː tawwaː
がいる 男 走るIMPF.3SG.M の後-GEN.1SG 今
「今，私の後を追いかけている男がいる」

b. **jibda**: rˤaːʒil jiʒriː wraː-jaː waːna: baːʃ naːquf
始めるIMPF.3SG.M 男 走るIMPF.3SG.M の後-GEN.1SG そして-私 どうして 止まるIMPF.1SG
「私の後を追いかけている男がいるのにどうして立ち止まれようか」

訳からもわかるように，(1b) は「～し始める」という意味で解釈することはできない。本発表は，この起動動詞が存在を表す場合（これを存在用法と呼ぶことにする）について，これがどのような意味で存在を表し，それが起動という動詞の意味とどう関係するかについて考察することを目的としている。

2. 導入

2.1. アラビア語チュニス方言の概要

アラビア語チュニス方言（以下，チュニス方言）は，アラビア語の現代アラビア語諸方言のうちのマグリブ方言に属し，チュニジア共和国の首都，チュニスを中心として広く用いられている言語である。

この言語の音韻としては，次の30種の子音が認められる（IPAに準ずる）。/b, m, f, θ, ð, ðˤ, t, tˤ, d, dˤ, n, s, sˤ, z, r, rˤ, l, lˤ, ʃ, ʒ, k, g, x, ɣ, q, ħ, ʕ, h, w, j/。母音は /i, a, u/ およびその長母音 /iː, aː, uː/ の6種である。

文法について簡略にまとめると，名詞のクラスは男性・女性に分かれ，単数と複数の区別がある。動詞は未完了形と完了形との2つの活用の系列があり，人称・数（単数・複数）・性（ただし3人称単数のみ）によって活用する。本発表で用いる記号と略号を以下にまとめる。

1, 2, 3: 1人称，2人称，3人称，-: 形態素境界，ACC: 対格人称接尾辞，AP: 能動分詞，DAT: 与格人称接尾辞，DEF: 定冠詞，F: 女性，GEN: 属格人称接尾辞，IMPF: 未完了形，IMPR: 命令形，M: 男性，NEG: 否定辞もしくは否定に関与する要素，PERF: 完了形，PL: 複数，SG: 単数。

2.2. 資料について

本発表は，2001年以来，チュニスにおいて断続的に行ってきた調査に基づく（JSPS科研費JP19K13183の助成による調査も含む）。資料としては，チュニス方言で書かれた方言資料『アル・アルウィー物語集』（Al-ʕArwi:, ʕAbd-al-ʕazi:z (1989) ħika:ja:t al-ʕArwi: Vol. I-IV. 2nd ed. Tunis: Al-Da:r Al-Tu:nisi:ja li-l-Naʃr）の第1巻を用い，そこから引用した例文については訳文末の [ ] 内にページ番号を記した。その意味と音韻解釈については，Ouacel Krir 氏（40代男性）の協力によっている。それ以外の例文については，Farouk Herzi 氏（40代男性）に教えていただいた。

3. 先行研究

動詞 bda: 《～し始める》が，存在を表すことについては，すでに複数の先行研究において指摘されている。

まず，チュニス方言の文法書，Singer（1984: 316）には，「ある，存在する（“sein, existieren”）」を表す「存在の動詞（Verbe d’existence）」として，6つの動詞が挙げられているが，そのうちの1つが，本発表の主題である bda: 《～し始める》である（他の動詞は，xrˤaʒ 《出る》，tˤlˤaʕ 《登る》，ðˤhar 《～に見える》，ʒa: 《来る》，sˤbaħ 《なる》）。ただし，Singer には，この動詞がいかなる意味で存在を表しているかの記述はなく，またそこに挙げられた15の例文に付された独訳からもそれをうかがうことはできない。

さらに，チュニス方言に近いタクルーナ方言の浩瀚な語彙集，Marçais and Guîga（1958-1961: 251-255）の bda: の項目にも，存在の用法の記述がある。すなわち，この動詞の14番目の用法（p244）として，“se trouver, être”と記されている。しかし，いかなる意味の存在なのかについては，ただ「起動の意味を失い，論理的コピュラにまで意味が縮小している」と記されるのみであり，また，そこに記載された8個の例文の仏訳からも，Singerと同様，そのニュアンスを読み取ることはできない。ただし，16番目の用法（p255）として，この動詞の未完了形3人称単数男性形が，「文頭に置かれて，後続する発話が，その前に述べられた事実の認識に基づいているということを表す（“en tête de propsition, pour marquer qu’un énoncé qui suit se fonde sur la constatation d’un fait antérieur”）」と述べているのが注目される。談話におけるこの用法については，本発表の主題とも関わるので，のちに改めて触れるが，この点を除けば，先行研究においては，この bda: については，一致して存在を表すとしているものの，その意味記述においては不十分であることが知れよう。

そこで，本発表では，こうした存在の bda: について，これが，①どのような意味において存在を表すのか，そして，②その存在に関わる意味と起動動詞としての意味がどのように関係しているのかについて，考察したい。

4. 存在の bda: の用例の検討

4.1. 起動動詞の bda:

存在を表す bda: の用例を検討する前に，まず，この動詞の起動動詞としての用法を確認する。この動詞はこの言語におけるもっとも一般的な起動動詞であり，通常は，未完了形動詞を後続させ，その動詞の表す動きが起動したことを表す。この動詞が起動の意味を持つのは，原則的に完了形で用いられた時のみである。

(2) a. iʃta: **bda:t** tsˢubb
雨SG.F 始めるPERF.3SG.F 降るIMPF.3SG.F
「（過去のある時点，もしくは現在）雨が降り始めた」

b. *iʃta: **tibda:** tsˢubb
雨SG.F 始めるIMPF.3SG.F 降るIMPF.3SG.F

ただし，意味的に完了形となり得ない場合は，未完了形でも起動を表す。(3) は未完了形によって習慣や反復される行為が表されている。

(3) kullma: nuxruʒ il-barra: iʃ-ʃta: **tibda:** tsˢubb
たびに 出るIMPF.1SG に-外 DEF-雨SG.F 始めるIMPF.3SG.F 降るIMPF.3SG.F
「私が外に出るたびに，雨が降り始める」

このような例外はあるものの，起動動詞としての bda: は完了形にほぼ限られる。これに対し，のちの例からもわかるように，存在の bda: は常に未完了形である。

4.2. 存在の bda: の意味とその用例

本発表では，この存在のbda: が表すのは，単なる存在というよりも，「ある基準となる事態に対して，その事態に先行して生じ，その事態が生じているときにも継続している事態」であると考える。これを図にすると，次のようになる。

(4) 基準となる事態
↓
＞＞存在の bda: の述べる事態＞＞
↓は，事態の発生を表す。左から右に向かう＞は，時間の流れを表す。

ここで，冒頭に掲げた例 (1) に戻ると，(1a) で述べられているのは「今，私の後を追いかけている男がいる」という1つの事態であるのに対して，(1b) では，「私の後を追いかけている男がいる」と「どうして立ち止まれようか（と私が自問する）」という2つの事態が，関係づけられている。この2つの事態の関係は次のようになろう。

(5)ある基準となる事態（すなわち，「どうして立ち止まれようか（と私が自問する）」）に対して，その事態に先行して生じ，その事態が生じているときにも継続している事態（「私の後を追いかけている男がいる」）

この2つの事態の関係は，次のように図に表すことができる。

(6)　　基準となる事態（「どうして立ち止まれようか（と私が自問する）」）

↓

＞＞存在のbda: の述べる事態（「私の後を追いかけている男がいる」）＞＞

このように，存在の bda: は，この動詞が述べる事態がある基準となる事態に対してもつアスペクト的な関係を表す。本節では，次に，このアスペクト的な関係を表す用法（アスペクト的な用法と呼ぶ）を見たのち，これが事態の関係についての認識を表す用法（モダリティ的な用法と呼ぶ）を検討し，最後に，3.で述べた先行研究における談話における用法（談話的用法と呼ぶ）について触れる。そして，この存在用法と起動相がどのように関わるのかを考察する。

4.2.1. アスペクト的な用法

存在の bda: のアスペクト的な用法には，2つの種類が認められる。1つは，2つの事態が明示された場合であり，もう1つは，存在の bda: を含む文を発話したという事態そのもの，あるいはそうした事態そのものの発見が基準となっている場合である。まず，前者の用法を見る。

4.2.1.1. 2つの事態のアスペクト的関係を表す用法

この用法における2つの事態とは，存在の bda: の述べる事態と，それに対して基準となる事態であるが，この両者のアスペクト的な関係は，(4) に表したものと同じである。次に具体的な用例を見る。

(7)　qa:lt-ilha:　l-aʕru:sa　ismaʕ　tawwa　ki:-nu:sˤlu:　l-iz-za:wja
言うPERF.3SG.F-DAT.3SG.F　DEF-花嫁　聞くIMPR.2SG　今　とき-着くIMPF.1PL　に-DEF-聖者廟

w-na:xðu:　bi:t　w-**nibda**:　a:na:　w-umm-i:
そして-取るIMPF.1PL　部屋　そして-始めるIMPF.1SG　私　そして-母-GEN.1SG

w-xwat-i:　ha:wka　sa:ʕasa:ʕa　i:ʒa:　w-qu:l-li:
そして-姉PL-GEN.1SG　そちら　時々　来るIMPR.2SG　そして-言うIMPR-DAT.1SG

si:d-i:　jʕajjitˤ-lik
主人-GEN.1SG　呼ぶIMPF.3SG.M-DAT.2SG

「花嫁は彼女に言った。『聞きなさい。これから私たちが聖者廟に着いて，部屋を借りて，私が母と姉たちといるときに，そのほうは，ときどきやってきては，ご主人様がお呼びでございますと私に言うんだよ』」[I-020]

この (7) においては「私と母と姉たちがいる」という存在の bda: の述べる事態と，「やってきて，言いなさい」という命令の遂行の2つの事態が述べられ，両者の関係は，次のように表すことができる。

(8)　　基準となる事態（呼びに来いという命令の遂行）

↓

＞＞存在の bda: の述べる事態（部屋にいる）＞＞

すなわち，存在の bda: が表しているのは，「私と母と姉たちがいる」という事態が，基準となる事態である命令「そこにときどき来なさい」の遂行に先行して生じ，この命令が遂行されている時にも継続しているという状況である。

次に挙げるのは，やはり同様な例であるが，異なるのは，基準となる事態と，存在の bda: の述べる事態が別々の人物によって語られているという点である。

(9) qa:l-ilha: ʕand-il-ʕasˤr talqa:-ni: fi:-ha-l-bqi:ʕa
言うPERF.3SG.M-DAT.3SG.F ころ-DEF-アスル 見つけるIMPF.2SG-ACC.1SG の中-この-DEF-場所

qa:lit imma:la barra: gidd nafs-ik w-kassim
言うPERF.3SG.F ならば 行け 直すIMPR.2SG 自身-GEN.2SG そして-整えるIMPR.2SG

aħwa:l-ik w-baddil ħwa:jʒa:t-ik ba:ʃ **tibda**:
様子PL-GEN.2SG そして-変えるIMPR.2SG 着物-GEN.2SG ように 始めるIMPF.2SG

ki:f-in-na:s
のように-DEF-人々

「彼は彼女に言った。『アスル（午後の礼拝の時間）のころに，お前は私をこの場所で見つけるだろう』　彼女は言った。『ならば，さあ行って，人並みの身なりになっているように，きちんとして，身なりを整えて，着替えなさい』」[I-177]

ここに述べられている2つの事態の関係を図に表すと次のようになろう。

(10)　基準となる事態（女がアスルのころに会いにやって来る）

↓

＞＞存在の bda: の述べる事態（男が人並みの身なりでいる）＞＞

このように，存在の bda: の述べる事態にとって基準となる事態は，存在の bda: を含む文とは離れて現れることができる。いいかえれば，この2つの事態を表す文は，統語的な関係においてではなく，文脈において結びつけられているということになる。したがって，そのような文脈上の関係さえ明白であれば，基準となる事態は必ずしも文として明示されていなくても，存在の bda: は現れうる。これが，次に示す，話者の発見・発話が基準となっている用法である。

4.2.1.2. 話者の発話の時間が基準となっている用法

この用法において描写されるのは，存在の bda: が表しているある事態について語り手が発見するという状況である。基準となる事態は，語り手の発見，およびそれを表す発話そのものである。これを，図にすると次のようになる。

(11)　基準：語り手の発見（およびそれを表す発話）

↓

＞＞存在の bda: の述べる事態＞＞

(12) daxlu: tilqa: mrˤa: ra:qda w-rˤa:ʒil ra:qid
入るPERF.3PL 見つけるIMPF.3SG.F 女 寝るAP.SG.F そして-男 寝るAP.SG.M

fi:-ʒnab-ha: a:h rˤa:ʒil-ha: rˤa:ʒil-ha: bʒu:d-u: rˤa:ʒil-ha:
で-脇-GEN.3SG.F ああ 男-GEN.3SG.F 男-GEN.3SG.F 本人-GEN.3SG.M 男-GEN.3SG.F

si-l-aʕru:s illi: ma:-jitkallim-ʃi **jibda**: ʕand-u:
氏-DEF-花婿 REL NEG-話すIMPF.3SG.M-NEG 始めるIMPF.3SG.M にある-GEN.3SG.M

mrˤa: uxra: w-tˤufla w-wlid
女 他のSG.F そして-娘 そして-息子

「彼らは（部屋に）入った。彼女は女が寝ているのを見出した。そして男がその女の脇で寝ていた。ああ，彼女の夫ではないか。彼女の夫その人，彼女の夫，口をきかない花婿殿だ。彼に別の女と娘と息子がいたのだ」[I-21]

ここで語られているのは，女性の主人公による発見であるが，その発見された事態，すなわち，自分の夫には別の妻子がいた，という事態が，主人公がそれを発見する以前から始まり，そしてその発見の時点においても継続していることが，存在の bda: によって述べられている。

(13) qa:l-lu: ʃku:n-ik inti: ja:xi: ins wlla: ʒa:n
言うPERF.3SG.M-DAT.3SG.M 誰-GEN.2SG あなた いったい 人間 もしくは 精霊
qa:l-lu: a:na: saʕd-ik a:h saʕd-i: **jibda**:
言うPERF.3SG.M-DAT.3SG.M 私 幸運-GEN.2SG ああ 幸運-GEN.1SG 始めるIMPF.3SG.M
hu:wa saʕd-i:
彼 幸運-GEN.1SG
「彼は彼に言った。『お前は誰だ。人間か精霊か』 彼は彼に言った。『私はお前の幸運だ』『ええ，俺の幸運だって。彼が私の幸運だったのか』」[I-345]

男性の主人公が自分の幸福（を司る男）を発見を語るこのくだりにおいても，主人公による発見以前より，この男が主人公の幸福を司る存在であり続けたことが，存在の bda: によって表されている。

4.2.2. モダリティ的な用法

アスペクト的な用法においては，存在の bda: の述べる事態と，基準となる事態との時間的関係が表されていたが，時間的関係というよりも，2つの事態の関係の認識が表される場合もある。次の例では，「お金がない」という継続する事態のある時点で「食べない」という事態が発生したというようにアスペクト的な読みもできるが，「食べない」という出来事の背景として「お金がない」という事態が存在するという解釈も可能であり，その意味では，存在の bda: の述べる事態が，基準となる事態の背景説明となっている。

(14) w-sa:ʕa:t jinsa: jbajjit-ni: bla:-ʕʃa: w-sa:ʕa:t
そして-時々 忘れるIMPF.3SG.M 夜を過ごさせるIMPF.2SG-ACC.1SG なしで-夕食 そして-時々
hu:wa bi:d-u: **jibda**: ma:-fi:ħa:l-u:-ʃ
彼 自身-GEN.3SG.M 始めるIMPF.3SG.M NEG-お金を持っている-GEN.3SG.M-NEG
w-la: ja:kul la: hu:wa la: a:na:
そして-NEG 食べるIMPF.3SG.M NEG 彼 NEG 私
「（飼い犬が飼い主について語る場面）そして，ときどき彼は忘れて私を夕食なしで夜を過ごさせる。そして時々，彼自身，お金がなくて，彼も私も食事をしない」[I-438]

そして，次の例では，もはやアスペクト的な解釈は難しいように思える。

(15) w-miski:n il-maðˤlu:m ki:f **jibda**: ħaqq-u:
そして-哀れなSG.M DEF-不正をなされた者 とき 始めるIMPF.3SG.M 真実-GEN.3SG.M
ba:jin w-la: min mustaʕrif bi:-h
明白なSG.M そして-NEG REL 承認するAP.SG.M に-GEN.3SG.M
「そして，悲しいことに，不正に扱われた人は，彼に明白な正当性があるのに，誰も彼を認めてくれないものなのだ」[I-156]

ここで述べられているのは，「彼に明白な正当性がある」と「その正当性を認める者がいない」という2つの事態であるが，これらのうち，存在の bda: によって述べられる「彼に明白な正当性がある」のほうがより根本的であることが表されている。

存在の bda: の述べる事態が，基準となる事態に先行して存在し，そして存在し続けているというアスペクト的な事態認識が発展して，前者の事態が後者の事態よりも優位である，あるいはより根本的であるという，事態そのものの位置付けを述べるモダリティ的な事態認識へと転化したと考えられよう。

4.2.3. 談話における jibda: の用法

「3. 先行研究」で触れたように，未完了形3人称単数男性形 jibda: には，談話に関わる特別な用法がある。それは，物語の語りにおいて，話が脇道に逸れたり，中断した時などに，元の文脈に戻る際に，「すでにこうしたことを言いました」と，聞き手に想起を促す用法である（なお，この言語においては3人称単数男性形は無標の形式であり，非人称として用いられることがある）。訳ととしては「すでに」が適当であるかもしれない。

(16) **jibda**: ja:si:di: qulna: darbkit w-ɣanna:t
始めるIMPF.3SG.M みなさん 言うPERF.1PL 太鼓を叩くPERF.3SG.F そして-歌うPERF.3SG.F
w-hu:wa jitʕaʃʃa: ʕa:mil ki:f
そして-彼 夕食を食べるIMPF.3SG.M するAP.SG.M 楽しみ
「さてみなさん，彼女が太鼓を叩き，歌い，彼のほうは大いに楽しんで夕食を食べたとすでに申し上げました」[I-014]

ここで jibda: によって述べられている事態とは，過去の発話が文脈として継続しているという談話的事態である。これに対し，基準となる事態となっているのは，そのような談話的事態を聞き手に想起させるというやはり同様に談話的な事態であると考えられる。すなわち、聞き手の想起という事態に対して，その事態に先行して生じ，その事態が生じているときにも継続しているという文脈的な事態が存在の bda: によって表されているといえよう。その意味で，この用法は，本発表がこれまでに主張してきた解釈と一致し，この存在の bda: のもつアスペクト・モダリティ的な事態認識が拡張されて，談話的な事態の関係を表すようになったということができる。

4.3. 起動相との関連

本発表では，存在の bda: が「ある基準となる事態に対して，その事態に先行して生じ，その事態が生じているときにも継続している事態」を表すとした。この動詞が表すとされる存在の意味は，実際には，事態の継続性に由来するものと考えられる。そして，この継続性は，その事態が先行して生じたこと，言い換えれば，先行して起動したことを前提とするのであるから，bda: の起動動詞としての性質は，この存在用法においても根本的な役割を果たしているということができよう。

5. まとめ

本発表では，アラビア語チュニス方言において「存在の動詞」と呼ばれるもののひとつである bda: を取り上げ，この動詞が存在というよりも，事態そのものに関わるアスペクト・モダリティ的な意味を表すことを論じた。

参考文献

Marçais, William et Guîga, Abderrahmân (1958-1961) Textes arabes de Takroûna. II. Glossaire. Paris: Bibliothèque de L'École des Langues Orientales Vivantes.
Singer, H-R. (1984) Grammatik der Arabischen Mundart der Medina von Tunis. Berlin/New York: Walter de Gruyter.